

鹿 持 雅 澄 雑 考

小 関 清 明

(高知大学文理学部・国語学国文学研究室)

Notes on Kamochi Masazumi

Kiyoaki OZEKI

(Seminar of Japanese Literature, Liberal Arts Faculty, Kochi University)

は し が き

鹿持雅澄の生涯と業績については、既にまとまった伝記の刊行せられたものもあり、すぐれた論文にも乏しくないけれども、なお補正の余地がないわけではなく、殊に資料の調査という基礎的な仕事はまだ充分にはなされていない憾みがある。本稿はそういう心持で筆者が少しずつ続けている調査の報告であり、零細な事実にこだわりわずらわしい資料をあげることをいとわない。もとより小さな断片にすぎないが、幾分でもこれまでの伝記の欠を補うところがあれば幸である。大切な資料文献を快く見せて下さった刈谷正勝氏・飛鳥井雅四氏に対し、ここに深く感謝の意を表したい。

I. 雅 澄 の 生 歿 年 時

鹿持雅澄は寛政三年に生まれ、安政五年に六十八才で歿した。この生歿の年については、これまで異説がないようであるが、その月日にいたっては諸説のあることは、近く鴻巣隼雄氏が「鹿持雅澄の万葉集古義と木村正辞。近藤芳樹の万葉学」(「万葉集大成」2. 所収)で言われた通りである。こまかい事であるが、確かなところが知られるなら、それに越したことはあるまいと思うので、私見を記しておきたい。

出生の日については、雅澄が書いた自筆の記録がある。一つは飛鳥井雅四氏所蔵の「家譜草稿」で、これは後に「飛鳥井家譜」になったものの第二稿であるが、それには、

雅澄 鹿持愿太

室武市半八正久女

以_レ寛政三年辛亥之歳四月廿七日 - 生

とある。今一つは刈谷正勝氏所蔵(飛鳥井玉恵氏旧蔵)の「自家年代記」であって、これは先祖の祭りを営むべき時日を容易に知るために作った年表であり、その寛政三年の欄に

雅澄生 四月廿七日

とある。雅澄自身が自分の誕生日を四月二十七日と考えていたことは、これらによって明らかかなことであり、われわれもこの日を以て雅澄生誕の日と定めるべきであろう。

死去の日については、飛鳥井氏所蔵「飛鳥井家譜」には、雅澄のところに、

安政五年八月十九日死于時年六十八

とあって、これが最も確実であるとせられているけれども、従うことが出来ない。それは「家君日記」(雅澄晩年の日記、四冊。安政元年十一月四日より同五年九月二十一日までの記事あり。刈谷氏蔵。)には安政五年九月二十一日まで疑うべくもない雅澄自筆の記事が書かれてあるからである。ところで戦火で失われた高知県立図書館の「飛鳥井家譜」の写本(「土佐史料」第三五八)は、筆者も写して所持するが、それには、

安政五年戊午九月廿七日死于時年六十八矣

とあって、原本のこの部分は附箋であったよし註してある。日記はこの年九月に入ってから毎日記事があるが、二十二日以後それが絶えているのは病のためであると解せられ、さすればこの月二十七日に死をむかえるにいたったと考えるのはきわめて自然である。故に他により確かな証がないかぎり、九月二十七日を以て雅澄の命日と定めるほかないであろうと思う。

Ⅰ. 雅澄と中村隆藏との師弟関係

雅澄が若年時代に、海南朱子学派の流れをうけた中村隆藏に漢学を学んだということは、諸家の雅澄伝のひとつとして記しているところである。が、雅澄はその述作の中に、一度もこの師の名を記していないようであるので、私はこの通説に多少の疑いをいだかないでもなかった。ところが近く、確かな資料によって、両者の師弟関係を証拠だてると共に、これまで漠然と伝えられていた師事の年代をも、およそ明らかにすることが出来たのである。

これも刈谷氏に、雅澄晩年の種々の文の草稿を記入した雑記帳めいたものが五冊あって、いずれも「家君遺稿」と題してある。そのうちの一冊は安政四・五年のものと思われるが、例の如く反故の裏面を利用した部分が多く、そうしてその裏面に問題の資料がかくされていたのである。即ちそれは、裏面三枚にわたって書かれた漢学修業に関する覚書であって、その内容の大体を記すと、最初に、卯年霜月より翌年三月にかけて都合三十日間で「易」を終えたとあり（細かくいうと、修学日の一々の日附があって、そのあとに「右易相仕廻、右三十日」とある。）以後ひきつづいて、三月より六月にかけて都合五十二日間で「詩経」を、六月より八月にかけて都合四十日で「書経」を、八月より十月にかけて「礼記」を、十月より十二月にかけて二十七日で「小学内篇」を済ませたとある。以上は第一・二枚の記事であるが、第三枚には、はじめに

中邑講尺

初会從今日
外篇始 正月十七日

とあって、三月に「公ノ御問アリテ中絶」し、その後も順調にすすまず、九月二日を最後として修学日の日附の記入が絶え、そのあとに

西潭先生十月五日江戸御出足

とある。

以上の覚書は、雅澄が中村隆藏について学んだ折のものであること、疑いがないと思われる。卯年は文化四年であろう。隆藏は世潭と号したとのことであるが、世潭はまた西潭とも書いたのであろう。覚書に「中邑講尺」「西潭先生」とあるのはそのためであろう。寺石正路氏「南学史」(P. 732)によれば世潭は何度も江戸に出ており、文化六年にも東上して藩公の侍読となったよしであるが、これは覚書の末に「西潭先生十月五日江戸御出足」とあるのと符合する。かくして雅澄が文化四年(十七才)十一月までに隆藏に入門し、同六年九月まではこれに師事した事が確実である。松山秀美氏「土佐歌人群像」宮地仲枝の項(土佐史談43号)によると、隆藏は文化二年四月に出府して仲枝と交替しているが、比較的小おそく学に志したと伝えられる雅澄が隆藏の門に入ったのは、恐らく隆藏がこの時の江戸勤めを終えて帰国した後、つまり文化四年早くとも文化三年の頃であると推定するのが穏当であろうと思う。

隆藏について学んだ書を見ると、易詩書礼のごとき難解のもの後に小学があらわれているが、これは何故か。覚書には「小学内篇」と標した下に「初而講尺」とある。その意味は恐らく、「礼」に至るまでは講尺を聞くのみであったが、「小学」の時には雅澄が師範代として初めて講尺をしたというのであろうと思われる。それとも又、「礼」までは素読を受け「小学」に至って師の講尺を聞いたというのであろうか。

註。前稿「鹿持雅澄の青年時代」(高知大学学術研究報告第4巻第34号)に於て、私は、文化九年に雅澄

が桃李館に学んだと述べ、桃李館は中村隆蔵の塾でもあろうかと述べた。今思うに、桃李館を隆蔵の塾と考えるのは根拠のないことである。又桃李館に於ては雅澄は業を受けたのではなく業を授けたのだとも見られるが、そのへんは文化九年日記の記事が簡単にすぎて、いずれとも決定しかねる。なお考えたいと思っている。

Ⅱ. 「古義先生著述書目」について

「古義先生著述書目」は飛鳥井雅四氏架蔵、雅澄の著書の名四十八を挙げ、そのうち二十八について解題を施したものである。門人寺田保が、師の労作の多くが世にほどこることなく滅びることを憂えて纏んだ旨の序文があるが、実は雅澄自身の筆に成ったものである。雅澄自身の手に成ったものであることは、後にも言うごとく本書の雅澄自筆の草稿の一部分が残っていることや、解題の文がいわゆる解題の域を越えて雅澄の学説や信念を語っている場合のあること、その他の点から明らかに知られる。

本書序文の末には「天保十三年辛丑八月五日」という日附がある。前記「家君遺稿」(天保十四年九月に書かれた部分)に見えるこの序文の草稿にも同じ日附がある。しかるに辛丑は天保十二年であるので、これをどう解すべきかが疑問となるのであるが、私見によれば、序文の日附は天保十三年八月五日をさす^と解すべきであるにしろ、本書の本篇の成ったのは天保十二年八月の頃であったと思われる。後にも必要があるので、その事を立証しておきたい。私見の根拠は

(1) 本書には補遺が附載せられているが、それを除いた本篇ともいべき部分に挙げられた雅澄の著書のうち、最も新しいものは、今日知られる限りでは、天保十二年六月八日成立の「名処考」である。ただ例外として、天保十三年三月の序文のある「書譜諺解」があるが、この書の草稿はより早く成っていたと認められる。(刈谷氏に、序文をそなえた「書譜諺解」の他に序文の添えられない「書譜諺解草稿」が二種ある。)

(2) 本書補遺の部に、「坐知佳境附録」(天保十二年九月成)「序文体要」(同十月成)「吾語貴家」(天保十三年四月成)「古家武志路」(同六月成)等が載っているから、本篇はこれらの書の成立以前に書かれたと考えられる。

(3) 飛鳥井氏に雅澄自筆の「著述目録其一」があり、これは本書本篇の草稿の半をなすものであるが、それに「辛丑六月十九日始同廿四日成」とあるので、本書本篇の成立はそれより後間もなくであったと推測せられる。

(4) 「坐知佳境」(天保十二年六月成)は本篇に挙げられ、「坐知佳境附録」(天保十二年九月成)は補遺に挙げられている。

等である。これらによって「古義先生著述書目」本篇が天保十二年八月頃成った事はまず疑いあるまい。これまで、雅澄の著書の年代を考える際に、その書が本書の本篇に載っているか補遺に載っているかによって、天保十三年以前の成立であるかそれ以後の成立であるかが判断せられたかに見受けられるが、それは少しく正確でなかったことになる。

さて、本書の解題で興味深いことは、雅澄の得意の説が(彼自身によって)例示せられていることである。その若干を挙げると、「古義」の「そらみつ」の解釈説、「枕詞解」の枕詞のつづき方の分類説、「玉蜻考」の説、「品物解」の「さきくさ」の説、「名処考」の難波を浪速・浪華など書くのはひがごとであるという説、「人物伝」の万葉巻六の丹比真人屋主と万葉巻八の丹比真人屋主とは別人であるとの説、「南京遺響」の羽衣説話に関する説等であり、その他いずれの著書についても雅澄が強い自信を持っていたことを示す言葉が少くない。なお右のうち「そらみつ」に関する説は、結論は「古義」と同じいが、説き方には相当の違いがある。

註。雅澄の「そらみつ」の解釈説には三段の発展がある。初の説は山内文庫本「古義」本文の説であって、それには「(そらみつは)整満そらみつといふころにて、取具ふ天香山などいへる類に、青山四周の美地をあそかきやまめぐれをたたへ賞美たる称ならむかとおもへど、さてもなほ古義ならず、なほよく考へていふべし」とあって、後にこの部分は除かれている。その代りに書入れられた説が、活版本「古義」に見える説である。第三の説が「書目」の説であ

て、これには、神武紀の文に「睨は是郷……曰虚空見日本国-矣」とあるのは、睨とある響に見の字を書いたのであって、同紀に「安定区字……曰埴安」とあるのが、安定とある響に埴安と書いたのと同じく、漢文の文字づらの上のさだであって、文字に泥んでその意を解してはならぬとあり、また延喜六年日本紀竟宴歌の蘇良美都は、倭の枕詞をやがて倭のことに言いつつしたのではなく、虚御津というこの語の本義に従って用いたものとしてはじめて一首がよく理解せられるとし、古風を失いたる世とはいえ延喜の頃の人はこの語の本義を心得ていたのだと言っている。(活版本「古義」の万葉巻頭の歌の註釈中に見える説と比べられる。)おそらくこれが雅澄の最後の説で、「古義」には書入れられることがなかったと解すべきであろう。「書目」が門人の手に成ったものでない一証でもあり、雅澄が繰返し自説を吟味した苦心の程を察すべき一例でもあると思われる。

この「書目」はもとより雅澄にとっては、別段新たな開拓を意味するものではなく、むしろしばらく研究の歩をとどめて過去を顧みたことを意味するが、こうした心境はどうして訪れたか。この書の執筆を初めた天保十二年六月十九日は、「名所考」の改稿の成った同年六月八日の直後に当っており、そうしてこの「名処考」までで彼の主要な著作はほとんど出来上っている。ライフ・ワークである「万葉集古義」について見ても、この時以後に残されているのは、わずかに「坐知佳境附録」と「名処国分」との二小冊に過ぎない。(この時以後も「古義」の補訂がつけられたことは言うまでもない。)恐らく「坐知佳境」の完成した時、雅澄は大きな喜びと安堵と満足とを感じると共に、己が生涯に一つの区切りが来た事を感じたのではなからうか。そうしてしばし立ちどまって既往の成果を鳥瞰したのではなからうか。事実このあたりで彼の生涯に一つの区割りがなされてしかるべきように思われるのであるが、その事はまた別に考察する必要があるだろう。

Ⅳ. 「雑誌」について

「古義先生著述書目」(本篇)に

雑誌 六十冊 嗣出不可計

此は翁のわかりしほどよりの随筆なり。今も筆をとどめられず。

とある。前節で考えたごとく「書目」は天保十二年に成ったと見られるので、「雑誌」は雅澄の若年以來天保十二年までに六十冊書かれていた随筆であることが知られる。「嗣出不可計」ともあって、当時なお書き続けて行く予定であったことが明らかである。

さてこの頃わたくしは「雑誌」の一部分、すなわちその十三・十四・十六・二十一・二十二・二十三・二十四・二十五・六十の九冊の零本を見ることを得た。いずれも雅澄自身の本で刈谷正勝氏の蔵せられるところである。これらのうち第二十五冊には奥に

此一冊文政八乙酉二月十九日書畢

とあってその年代が明らかである。第十三・十四・十六の三冊は、文政四・五年頃のものであることが、それぞれの記事内容によっておよそ確められる。又第六十冊は天保十二年頃のものであること上記の通りである。それで、「雑誌」は文政四年より数年前から書き初められ、年々書きつけられて、天保十二年には六十冊を数えるに至ったということになるが、第六十冊は半以上空白のままの紙を残しているのを見ると、それ以後書きつけられる事はなかったらしいのである。

なお、雅澄は「雑誌」を起稿するより前に、既にこれと同様の随筆を年々書きためていたと見え、「雑誌」第二十二・第二十三の二冊の記事はすべて

癸酉雑誌(巻四・五)

甲戌雑誌(巻一・二・三・四)

乙亥雑誌(巻一・二)

よりの転載である。癸酉、甲戌、乙亥はそれぞれ文化十・十一・十二年に当たっている。(なお第二十一冊にも「癸酉秋月考」と註した記事がある。)以て青年雅澄の勉学の様を窺うべきであろう。

さて「雑誌」九冊の内容であるが、多岐にわたった記事は大別して二つになる。その一は、万葉

集その他の歌集、古事記六国史等の古典、並びにそれらの註釈書、その他種々の書からの抄録であって、これが大部分を占めている。碑文や書簡等の文書や師友の和歌を記録したところもある。その二は古語の解釈その他について自己の学説乃至意見を述べた部分である。(註釈書よりの抜書には、自説を附記したところがある。) いずれも雅澄の研究状態を示すものであるが、特に後者は、断片的ながら彼の学説等を知る上に役立つところが少なくない。以下若干の例を掲げてみることにする。

まず抄録の部分で興味をひくもの二、三を挙げよう。第十四冊は文政四年ごろの執筆であろうと思われるが、それに、石川年足朝臣墓誌とそれに関する城戸千楯の藤垣内大人(本居大平)宛の書簡二通との写しがある。墓誌の発見は文政三年三月二十六日で、書簡の日附は五月二日及び五月七日であるが、かかる資料がどういう径路で比較的短期間に雅澄にもたらされたものであろうか。勿論この資料は、「古義」及び「人物伝」の石川年足の伝に利用せられている。

第二十一冊には「宮地翁小録」からの、次のような記事の抄出がある。(「小録」は宮地仲枝の「雜誌」ともいふべきもので、九十九冊あったというが、戦災で失われた。)それは、

万葉古写本伊勢の商家に在、行成卿などの書写も交りありとぞ。白川侯より借用之事砂仰下之處、御用立之儀は不相成、直六百両ならばうり可申と申しと也。

勢州富山喜兵衛所蔵、今は撰州神戸田原屋某所蔵、田原屋は富山が実家兄弟の由、但欠本也。

其欠の分熊本侯の京都留守居浅山斎宮助所持せりとぞ。

という一節である。松平定信が和学講談所の元暦校本万葉集の模写本を写すより先、富山家に原本の借用を申込んだということを伝えたものが他にあるかどうか。とにかくかような万葉学の情報ともいふべきものを、仲枝は聞書しているものであり、土佐に於ける万葉研究の弊囲気を想見せしめる一材料となろう。

第二十五冊はその過半が「枕雙紙春曙抄」よりの抄出であるが、他に「百人一首改観抄」と「百人一首古説」とからの抄録がある。この「百人一首古説」は、谷垣守の奥書のある本であって、その奥書の末に

延享四年丁卯二月下浣 門人谷垣守拜書

とあり、垣守が明らかに真淵の門人と称しているのが注意される。真淵の学問がこんな形で雅澄へと糸を引いているのも忘れてはなるまい。

註。井上豊氏「加茂真淵の学問」(P. 538)所引の三宅清氏の研究によれば、垣守が延享四年正月から二月にわたって「百人一首古説」五冊を書写した趣が、垣守の日記に見える由である。今、高知県立図書館の山内文庫に、次の如き奥書を有する「百人一首古説」巻二がある。

右百人一首古説二、蒙倉橋老人之惠示、於武江藩邸草写之、誤字脱落甚多、異日得正本校合浄写則幸甚
延享四年丁卯二月十一日 谷丹四郎垣守謹識

次に雅澄の学説意見を述べた部分を見ることにする。第二十一冊に、真淵の「語意考」から月の名の語源説を書きぬき、そのあとに自説を記したところがある。

今按、二月はきさらぎ芽成具かひなり美月の意なるべし。カビの切キ、ナはサに通、良は利と同韻、具美はつのごみめぐみのぐみと同じ。月は惣略。さて是は草木のうへに係れり。

十一月はしもつき潤月しほみつきの意なり。ホの濁音もと通ふは常。そは草木の凋枯る月なればしかいふなるべし。

六月はみなづき繁成月しほなりつきの意、こは稲につきていふ。稲は五月に苗を殖て六月には繁しほ成立ものなればしかいふ。又按に繁比の意か。

癸酉秋月考

癸酉は文化十年であって、これらは雅澄二十三才の時の説である。「古義」には、万葉にみなづきの用例があるにも拘わらず、みなづきの語源説が見えないのは慎重を期したのであろう。この当時語源についてしきりに考えた見え、同じく第二十一冊に上の月名の説にひきつづいて、癸酉秋月の考えとして

- 万^{よろづ}は弥^や諸^{もろづ}津なるべし、ヤモの切ヨとなる、津は助辞、一ツニツのツに同じ
 ○千^ちは多^た利^りの切^きりたるなるべし
 ○字^{あざな}は異^{あだな}名の意なるべし、ザとナと通^とふ例は幾段をイクキザイクキダと云が如し。又フサガリとフタガリとかよふ、ケタルをケサル

など見える。同じ冊には又

- 許知多伎、本居翁説ニコチタキハ言^{コトイタキ}痛ノ意也トイヘルハウケガタシ。集中ニ事痛言痛ナド書ルモ共ニ借字也。コトイタキノトイ切チナレバ、コチタキトナル故、許知多伎ノ借字トス。字意ヲ思フベカラズ。許知ハ中昔ノ物語文ニモ物ノシケクウルサキ事ヲコチゴチシト云ル許知也。言痛ノ意トシテハ通エヌ処多シ。タキハ真^{マコト}ヲ真^{マコト}タキ、美^ミヲ美^ミデタキ、恋^{コイ}ヲコヒタキナド云タキノ如シ。

とある。「古義」ではこの説は撤回せられて、宣長の説が用いられている。

第十六冊には、「古今和歌集打聴」からの抄録があり、所々雅澄の意見が書き加えられている。一所だけ挙げると、古今序の文について「打聴」に「詩の六義もていへれど、それをしらぬよそごとにいへるは上手の筆つきなり云々」とあるに対して、雅澄は

雅澄云、此序に六のさまといはれしは漢詩の六義といふを本として、全それになすらへて云ることなるを、もとより此方の歌の体に六義あるごといひ、さてからの歌にもと漢詩のことをばよそげに云るは、いともいともあるまじく心きたなきわざならずや。さてまことには歌に六義といふものあるべからぬを、しひて漢になすらへて六義をたてむには、ただになすらへたるよしあらはにいばなほさてあるべき。かく云るはうはべをつくろひかくすあしき世の風俗の端を開けるものとやいふべからん。かかるを打聴に上手の筆つき也と云るはいかにぞや。(下略)

と難じている。この考えは天保十二年の「古今集序存疑」にも見えるものであるが、早く文政五年頃に雅澄の抱いた所であった事が知られるわけである。

最後にわたくしの最も興味を感じたのは、第二十二冊の、甲戌雑志より転載せられた部分に見える万葉集についての説である。それは万葉に関する新説二十二ヶ条を列記したもので、末に

已上万葉集卷々愚考文化十一年甲戌美濃屋忠五郎ニ託シテ難^{フカシ}波人関谷敬蔵深ニ見セニ遣ス所ノ控ナリ

とある。今この部分を「万葉集卷々愚考」と名づけよう。美濃屋忠五郎は雅澄の友人武藤平道(藤原平道)のことであり、文化十二年雅澄と羽山郷に遊んだことがあり(松山秀美氏「鹿持雅澄年譜」)又文化十四年本居宣長の十七回忌には宮地仲枝・谷景井・鹿持雅澄・南部巖男・大倉鷺夫等と共に追悼の和歌を作ったこともある。(刈谷氏蔵「雑記集」)今村楽に国学を学び、後本居大平・藤井高尚の門に入った事もあるという。(寺石正路氏「土佐偉人伝」)関谷敬蔵はいうまでもなく鈴門の万葉研究家であるが、普通その名を潜と書いてヒソムと訓んでいるけれども、フカシと訓むべきものかも知れない。文化十一年は雅澄二十四才であるが、思うにこの頃には彼の学力大いにすすみ、遠く国外に師友を求めんと欲するに至ったものであろう。「山斎集」によると、翌文化十二年には清水浜臣との文通が初められているが、これもそういう彼の希望から起ったことであろうと察せられる。

「万葉集卷々愚考」の説は、万葉集卷一より卷二十までにわたっており、必ずしも妥当の説と言えないものも多いが、中には既に、「得田僞異」(十二・2949)をウタテケニと訓んだ卓見の如きも見える。大抵「古義」と同説で、ただ「古義」の方がより詳密なだけであるが、二三「古義」とちがった説もある。「略解」がしばしば非難の対象になっているのや、誤写説が半を占めているのが特徴的である。古写本を用いて本文批評をなしたところは見当らない。「代匠記」が引合に出されたところも全くない。文化十年の「万葉集記聞」にも「代匠記」は一所も引かれていないので、この頃雅澄はまだ「代匠記」を見ていなかったかと思われる。(「雑誌」第十六冊には「代匠記」よりの抄録

が少しくあり、文政五年頃のものと思われる。) 若き雅澄の万葉研究状態を偲ばしめる記念物としては、「万葉集記聞」が知られているのであるが、それは巻一の後半を存するのみであり、又どの巻まで成稿していたのか明確には言えないが、宮内庁書陵部所蔵の「鹿持雅澄蔵書目録」にも「万葉第一記聞一冊」とあるのみであるので、巻二以下には及んでいなかったものと推測しても大過なかるうと思われる。これに対し、本資料はわずかな分量であるけれども、雅澄が既にともかく万葉の全巻にわたって新説を提出するに至っていた事を示すものであり、その意味で珍重すべき文献であろうと思うので、以下煩をいとわずその全文を掲げておきたい。「古義」と比較するの勞を惜しまれないならば幸である。

○疊有青垣山<sup>万葉一卷
十九丁長歌</sup>

有は著ノ字の誤にてタ、ナツクなり。六卷^{十四}芳野宮者立名著青墻隱云々、十二卷^{三十}田立名付青垣山之云々、古事記<sup>倭武命
の御歌</sup>にやまとは國のまほろは多々那豆久阿婁加伎夜麻云々などあるを考へし。本のまゝにタ、ナハルとよみては有ノ字あまれり。

○吾崗之於可美爾言而<sup>同二卷
十二丁</sup>

言は乞ノ字の写し誤也。言乞(稱者云、原本コノ二字草書ナリ)いとよく似たり。十三卷^{十九}天地之神乎會吾乞云々、十五卷^{廿二}あめつちの可未乎許比都々云々など有その証也。又集中に神に乞祈てふ言多きをも併考給ふへし。日本のまゝにてはおたやかならぬを、いかて今まで註者等の心は著さりけん。

○三諸之神之神須疑<sup>同二卷
廿四丁</sup>

この歌は如是<sup>カクノミニアリトシ
ミツツイキマヨソオキ</sup>耳荷有得之覽乍宿不寐夜叙多とありしを誤れるものなるへし。猶これにはいふへきこといと多かれと、言長ければつくし侍らす。

○三津崎浪矣恐<sup>同三卷
十五丁</sup>

舟公宣奴島爾はもと舟寄金津奴島崎爾とありしを、寄を宣に金を公に誤、又そを下上に誤、さて津ノ字を脱したるなるへし。さて荒木田氏云、わか蔵る古本には島の下に一字の闕あり、されは島の下に崎ノ字脱したるへしといへるによるへし。さらはフネヨシカネツヌシマノサキニと訓へし。

○劍太刀身爾取副常<sup>同四卷
三十二丁</sup>

怪はシルジとよむへし。十七^{十四}あらたしきとしのはしめに豊乃登之思流須登ならしゆきのふれるは、十九^{三十}いにしへよ無利之瑞^{シルシ}など見えて前表の意なり。略解にサガとよめるはあたらす。

○遠等咩良何佐那周伊多斗乎<sup>同五卷
九丁長歌</sup>

佐那周は^{サシヲ}閉鳴す也。源氏物語にも、此御かうしはさしてんとてならず也とあり。さてサシを略きてサとのみ云は例有。玉藻吉讃岐といふも玉を指貫の意、又荒木田氏の久方といふは日指方の略そといへるをも併考へし。

○山川清々<sup>同六卷
十丁長歌</sup>

清々は崎清の誤なるよし浜臣説甚詳也。さて此下には必脱句あるへし。試に云ばココミレバてふ言のありしか脱たる歟。廿^{廿五}の長歌考合べし。

○塩満者如何將為跡香<sup>同七卷
廿一丁</sup>

神我手の手は戸ノ字の誤なるへし。十六卷末に怕物歌とて奥国領君之染屋形黄染乃屋形神之門渡^{シメヤカクキシメノヤカガミザトツク}とよめると同じく、海門の波荒くて甚恐しき所を云なり。

○妹自乎始見之埼乃同八卷三十九丁

始は跡ノ字の誤そと岡部翁の云れしはいとよろし。埼を丘辺二字の誤そといはれしは、この上に射目立而跡見乃丘辺置麦花云々とあるに強てかなへたるなれど、字の形も甚迂ければさにはあらし。思ふに埼は旧本のまゝにて乃は有ノ字の誤なるへし。有乃（稿者云、原本コノ二字草書ナリ）草書よく似たり。トミノサキナルとありしなるへし。

○妹等許今木乃嶺同九卷三十一丁

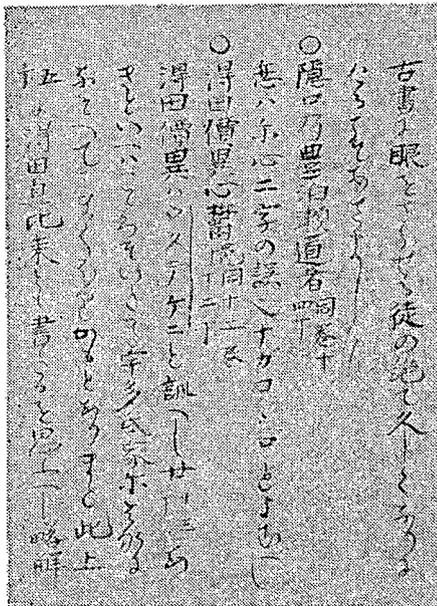
五廿二丁伊毛良、十三廿一丁に妹等とも見えたれば、妹等許といはむもさることなから、八三十七丁妹許登吾去道乃、十四十六丁妹許跡馬鞍置而射駒山、七九丁妹所等我通路などあるをおもへは、こゝも本は妹許等とありつらんを顛倒せる歟。古は吉ノ字の誤也、ヨキヒトとよむへし。吉人は宇治若郎子を指牽れるなり。これを古よりフルヒトと訓来れども、フルヒトてふ言あるへくもなし。

○和射美能嶺往過而同十卷六十三丁

脈毛無は敷手念の誤なるへし。さらはシキテオモフトと訓へし。八五十八丁ま木のうへにふりおける雪のしくしくもおもほゆるかも――

○玉響昨夕見物同十一卷五丁

玉響をタマユラと訓来れともさる詞あるへくもあらず。玉の音をユララともユラクともいふ詞はあれとも、そをやかてタマユラといはむは古語の体にながへり。もししひて玉の音をタマユラといふ事有にもせよ、此歌にてはいかにとも解へきよしなし。かれ按にこは烏玉とありけんを下上に玉鳥と誤り、又鳥を響に誤りしなるへし。烏響（稿者云、原本コノ二字草書ナリ）草書混ひやすし。かくて一首の意は、絶々になるにこそ恋しき事はあなれ、昨日の夕に相見しものを、何とて今朝恋へきものは、恋へきものにはあらざるをと、みつから吾身をなくさむる也。此下十八丁昨日見而今日社間吾妹子之幾許誰手見ウベナフ巻欲毛とあるにて考知へし。さるを略解に旧本にて強てたずけて解なせるはいかにそも。略解の信従ウベナフにたらさるをしるべし。さて堀川百首に、おくれしと山田のさなへとる田子の玉ゆらもすそほす隙そなき、愚草に、玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふる宿の秋風なとあるは、右の歌をタマユラとよみたるあやまりをうけて又誤てよめる也。古書に眼をさらせる徒の絶て久しくなりにけるこそあさましけれ。



「万葉集卷々思考」(雑誌第二十二冊)の一葉。

○隠口乃豊泊瀬道者同卷十四丁

恋ハ爾心二字の誤也。ナガコロとよむへし。

○得田伽異心同十二卷十二丁

得田伽異はウタテクニと訓へし。廿十三丁あきといへはこゝろそいたき宇多氏家爾はなになそへてみまほりかもとあり、また此上五丁に得田直比来とも書たるを思ふへし。略解に異は累ノ字の誤としてウタガヘルとよめるは中々の謾言也。

○挂纏毛云々往向年緒長同十三卷廿七丁長歌

向は回ノ字の誤にてユキカヘルなるへし。十九十一丁にも去ユキカヘルトシノヲナガク更年緒奈我久とあり、猶多し。略解に往向ユキカカフは外にも君はませともわきて此君に心よせて仕奉るよしそといへるは、字の誤をも思はさる強言也け

り。なほ此歌には大きに論あり。

○宇奈波良乃根夜波良古須気安麻多阿礼婆伎美波和須良酒和礼和須流礼夜同十四卷
廿五丁

根夜波良古須気はニヤハコノス菱和子コノス管なり。ナエの切ネとなる。佐禰葛佐禰加夜などの禰も奈要の切まりたる也。諸説解得ず。

○安伎左良婆和我布禰波氏牟和須礼我比与世伎氏於家礼於伎都之良奈美同十五卷
十四丁

於家礼は常に於家といふに礼の言をそへたるにて下知の辞也。此下四十しろたへのあがしたころもうしなはず毛氏礼わがせこただにあふまでにとよめる毛氏礼と同格の詞也。略解に於家礼はオキテアレを約いへりとあるはうへなひがたし。

○緑子之云々打十八為麻続児等同十六卷
七丁

打十八為はウツソヤシとよむへし。反歌に端寸八為と書るにても八為はヤシとよむへきをさとるへし。冠辞考にウチソハシとよめるは非也。ヤシはヨシエヤシハシケヤシのヤシと同じく助辞也。略解に春海が八為二字は鳥の一字の誤りにてウチソヤ也と云りとあるは、一卷に打麻乎とあるをおもへるなれと、そはいはれぬこと也。春海てふ者のひがことつくは論にもたらず。

○阿里佐利底能知毛相牟等於毛倍許會都由能伊乃知母都芸都追和多礼同十七卷
十六丁

阿里佐利底はアリシアリテ也。シアの切サ、春サレハ秋サレハなといふも春シアレハ秋シアレハにて同じ。廿卷三十に於保伎美能美許等爾佐例波云々とあるも、命ニシアレハの意なるにてもさとるへし。略解にサルは年月日の経行を云也と宣長云りとあるは、解得ずといふべし。なほ委き考あり。

○夜伎多知乎刀奈美能勢伎爾安須欲里波毛利敝夜里蘇倍伎美乎等登米牟同十八卷
十七丁

此枕詞は焼太刀之利とかゝれり。この乎は之に通ふ乎にて、春日乎春日山、御佩乎劔池、処女等乎袖振山、味酒乎三輪などいふ乎と同じ。冠辞考に焼刀を磨とつゞけしなるへしと云るはあしかりけり。

○桃花云々青柳乃細眉根乎同十九卷
廿二丁

細眉根はクハシマヨネと訓へし、ホソキマユネとよめるはいみしきひがこと也。

○多可麻刀能乎婆奈布伎故酒秋風爾比毛等伎安気奈多太奈良受等母同廿卷
十丁

尾花吹越秋風を便にして、いさ紐解開む、直に妹に交にはあらずともと、いと戯ていへる也。紐解は男女の交接する容なればしか云り。直ならずと云て直に相見る意になるは、十廿七よしゑやし雖不直ぬえとのうらなけをるとつけん子もかも、十六十三味飯を水に醸なし吾待しかひはかつてなし直にしあらねは、なといへるにおなし。略解は戯の意なるをえしらて誤れり。

以上が全文である。関谷潜からどのような応答がなされたか、知るすべもないようである。

V. 分一役時代の雅澄の日記

雅澄は天保二年六月十六日御浦御分一役を命ぜられ、同六年七月十七日その役を免ぜられるまでほぼ四年の間に、羽根・田野・和食・窪津に赴任し、都合二年間ばかり家を離れて過した。その間の記事を主とする分一役時代の雅澄の日記三冊を、刈谷氏で見ることを得た。一冊は表紙に「緊要日録」と題し、天保二年六月より同三年五月までの日記であり、次の一冊は「服膺日録」と題し、天保三年六月より同年閏十一月まで、最後の一冊は単に「日記」と題し、天保四年一月より同五年十一月まで、の日記である。日記とはいえ、これらはいずれも公務に関する備忘の記事を主としていて、学者又は歌人としての雅澄の面目はほとんど現われていない。羽根村に於ては「人物伝引目」を作つて「万葉集人物伝」執筆の準備をしており、田野村では着任早々に盆踊歌を集めて「巷

謡謡」の主な材料にしており、和食村では「古言訳通」の著作に従事したらしいし、又この間多くの作歌があることは「山齋集」で明らかであるが、これらの事は日記には全く影をおとしていないのである。しかし雅澄の学問に関係のある記事が全くないでもなく、また封建時代の一人の浦役人としての雅澄を知るのも無意味ではなからう。以下これらの日記によって若干を記しておく。

一. 緊要日録

天保二年六月十六日御勘定方に出頭を命ぜられ、御浦御分一役を仰付けられる。十八日より御浦御分一役場に日勤。二十七日、羽根浦御分一役取切勤を仰付けられ、八月五日赴任の途に上る。出発の前日次のような書類を提出し、日記にその控えをとってある。

差 出

伝馬一匹

- 一、送夫三人 内一人 御用物持夫
二人 自分渡

右者此度羽根浦御分一役場江為交代被差立候間右人馬並宿賄夫共相渡候様可被仰付候

卯八月四日

鹿持藤太

御郡奉行所

私は前稿「鹿持雅澄の属した階級について」（高知大学学術研究報告第3巻第3号）に於て、雅澄が御用人（後に白札）という格式であって、こうした旅行の際には、伝馬一匹送夫一人しか与えられなかったと述べたが、それは宝暦十二年の規定によったのであった。今、雅澄が、御用物持夫を除き送夫二人を与えられているのは、その後規定の変更があったものと思われる。

任地への旅は細かに記されている。山路の他は葱花駕籠（そふけ籠ともある）に乗っている。八月七日、羽根川のほとりに、羽根浦大庄屋・浦年寄・地組頭の出迎えを受けてやがて任地に到着、ただちに前任者から、前年度分御蔵米並びに本年度分諸分一銀の引渡を受けた。十一日には大庄屋・年寄・組頭並びに小遣を召連れて、浦中見廻を行った。当時格式御用人という軽格武士である雅澄が、郷浦に赴いて如何なる地位を占めたかがおおよそ想像せられよう。以後の日記は、おおむね船舶による物資の出入に関する事務的文書の控えであるが、二三の注意をひく記事が見当る。

その一つは祖母の病死である。その報を留守元よりの急使がもたらしたのは十月二十七日の夕刻であった。留守よりの口上、医師の容体書に接して「言語＝絶候事」と記している。学者らしい記事としては、公用で社寺に赴いた際には、必ず棟札や什物に関する記録をしている。（次の二冊の日記もこの点同じい）特に興味深いのは次の一条である。

- 一. 十月廿五日泉州貝塚塩屋治郎兵衛廻船当浦へ廻着……右ノ船沖船頭与吉俳名人徳ト唄フ話ニ、紀州海部郡ニ大崎ト云所アリ、ヨキ蔭也、浜ニ人家アリ、遊女ナトモアリ、往来ノ船大方此蔭ニ着。サテツノアタリニ神ノ小浜ト云ハナキヤト聞シニ、大崎ノ蔭ヨリ二里ハカリオクニイタキノ大権現ノ社アリ、モハラ漁業ヲ祈ル神也、仍テ此神ノオハシマスカ故ニ、大崎ノ浜ヲ神ノ小浜ト云シナルヘシトイヘリ。（下略）

この船頭の話は「古義」六之下（1023番歌の註）並びに「名処考」に利用せられている。俗事にたずさわりつつある雅澄の脳裏にも、たえず万葉が去来していたことを物語る挿話として面白い。

天保三年正月二十二日、交替者到着、夕刻帰路につく。羽根在任おおよそ六ヶ月。これより当分の間は高知にあって、御浦御分一役場につとめる。

二. 服膺日録

天保三年六月六日田野浦御分一役取切勤を命ぜられ、ふたたび家を離れることとなる。七月七日出足、途中大津村の信義明神に参拝した。信義明神は雅澄の祖飛鳥井雅量（3）の墓所のあとに、天保二年雅澄の造営した小祠である。七月八日田野着。在任おおよそ六ヶ月。閏十一月十一日交替、ただち

に帰途に上り、十四日帰宿。

三. 日記

天保四年一月二十一日和食浦御分一役取切勤を命ぜられ、四月十日三たび家を離れ、途中信義明神に参拝して任地に向う。十月八日交替、翌九日帰宿。十日御浦奉行中月番に諸分一銀縮目録を差出す。在任およそ六ヶ月。

同年十一月十六日窪津浦御分一役取切勤を命ぜられ、翌年二月四日同地に向う。六日間の旅。この浦は鯨で名高く「窪津くちらにはなまへの岩」という歌の文句もあると、日記に見える。到着の当日「折節鯨漁有之趣=付……浜辺=出見物ス」とある。その翌々日も背見鯨がとれたが、今度は見物ではなく、役人として「浜へ改に立越候事」とある。五月には足摺山で漁業繁栄祈願の法会があり、命によって列席した。六月三日の記事のあとに「以下因病障不能具記」とあってその月は記事なく、七月初にもなお病気の趣が見える。この年は正月にも病欠勤の日があった。

九月十三日交替して帰途に上る。途中祖先の住地であった加持村に立寄り、庄屋を訪ね、相伴うて加持城趾に建立中の鹿持神社(横亘七尺奥行二間半)を見た。十八日帰宿。旅の疲れのためか病氣をおこし二十六日まで勤務を休む。この度は在任八ヶ月であったのは、天保四年十月に任期に関する規定が変わっていた為である。

註.

- (1) 「人物伝引目」は宮内庁書陵部所蔵。万葉集にあらわれる各人物の伝記が「古義」註釈の稿本の何巻何丁にあるかを、人物の身分別に表示したもので、「万葉集人物伝」執筆の準備として作られたものと思われる。最後の紙の折目のところに「天保二年辛卯於羽根官舎編」とあって、古義の稿本が雅澄の任地にも運ばれていたことが分かる。「官舎」とは言うまでもなく御分一役場のことである。
- (2) 「巷談編」上巻の大部分をめている土佐おどり歌四十八番のあとに書かれている文。
- (3) 「古言訳通」の跋文には天保八年八月十四日の日附があるが、序文の末には「天保四年癸巳六月六日」とある。後者は和食滞在中に当る。
- (4) 「飛鳥井家譜」の備考(雅量の項)によると、雅量の墓を土人尊崇して信義明神と称し毎年九月二十七日を祭日としていた。そこに雅澄が祠を造営したのが天保二年正月二十七日で、同七年九月二十六日再建している。
- (5) 「飛鳥井家譜」備考(右京進の項)に、「天保七年丙申八月十五日託_二于谷加賀藤原正吉_一奉_二崇神靈_一造_二于神祠鹿持城蹟_一奉納_二寿詞一章長歌一首並短歌_一祭日毎歲八月十五日」とある。予定より後れて祠が出来上るのであろう。この時の長歌短歌は「山齋集」にある。

VI. 「山齋集」活版本に脱落あること

山本修三氏編「山齋集」短歌之下には歌の脱落したところがある。(同書によった「近世万葉調短歌集成」「国歌大系」などに於ても同様である。)即ち、嘉永七年の作のうち「惜花」という題の歌(同書P. 192)の次に

山躑躅

都追慈花木丘開山乎越來者妹之赤裳之為形之所念

折藤

藤花折而挿頭津霍公鳥鳴羽触丹裳落者惜見常

三月尽

打躑春者今日耳諾名々々鶯副裳浦触而鳴

首夏山

含有跡云之峯上之卯花之可開月丹成丹而不有哉

残花

霍公鳥聞卷欲而不念丹八重山超而桜花見津

聞霍公鳥

橘者諾衰殖而寸草取而鳴鶴公鳥雖聞不足來

故郷橘

故郷之花橘之本似居而昔乎本名偲鶴鳴

の七首が落ちているのである。宮内庁書陵部所蔵の「山斎集」にこの七首があり、又、嘉永四年一月より安政五年三月までの作を長歌短歌文章の区別なしに年代順にあつめた同じく書陵部所蔵の「裁歌」にも、この七首がある。そうして、この七首のみを特に省く理由は考えがたい。なお「裁歌」によれば、「惜花」より二首前の「初春鶯」以下の、この七首を含めた合計十六首は、福岡家の出題に応じた作であることが分かる。

註。「千首のくり言について」（高知大学学術研究報告第3巻第22号）で私が「裁歌」所収の短歌で「山斎集」に見当らぬものが一首あると述べたのは疎漏であって、実はそういう作は一首もない。ここで訂正する。なお刈谷氏にも「裁歌」と題する雅澄の年代順歌集があり、これは文政十二年より天保十五年六月までの作を、長歌短歌文章の区別なしに収めている。この書の商品も、もれなく「山斎集」にとられている。

（終り）

（昭和31年9月26日受理）